

安土町地域自治区長便り

No. 33 平成 24(2012)年 3 月 23 日(金)
発行 安土町地域自治区事務所
(安土町総合支所)

< 社会福祉協議会と学区まち協の懇談 >

3月6日(火)、市社協安土支所で、社協役員と学区まち協準備委員が会し、今後の組織や活動のあり方を協議しました。



< 第4回生産森林組合運営検討委員会 >

3月7日(水)、安土町総合支所で、今後の里山のあり方や生産森林組合の取り組みについて意見を集約しました。



< 老蘇学区まち協準備委員全体会 >

3月9日(金)、まち協発足を表明する3月30日の設立総会に向けて、組織や役員構成、会則について協議しました。



< 老蘇学区まちづくり懇談会 >

老蘇学区では、まち協の発足を目前にして、8つの全ての自治会に出向き、地元説明会を開催しました。



▲老蘇団地の懇談会の様子



▲石寺の懇談会の様子

< 第2回ほっこり人権コンサート >

3月11日(日)、安土町地域自治区の手作りのイベントが、安土コミュニティ防災センターで開催されました。東日本大震災復興を願ってのコンサートや災害支援の活動など報告がありました。



▲アンダンテの歌と演奏

<安土中学校の卒業式>

3月13日(火)、卒業式が挙行されました。今回は、市長が来賓として臨席して下さいました。105名の中学生が旅立ちました。



<VR安土城の企画発表>

3月13日(火)、花園大学と大阪大学に依頼して映像で安土城を復元する安土城バーチャリアリティ企画の発表がありました。平成25年度には完成予定。



<差別発言事件を考える学習会>

3月16日(金)、3年前の「旧安土町の差別発言」事件を総括する学習会が開催されました。再びこうした差別発言を起こさないように、また許さないように学習会を通して決意を新たにしました。



<視点>

・ふと立ち止まって空を見る。この空はどこまでも続いている。そして、また元に戻る。しかも、世界中の人が見ている。ふるさとの空も異国の空も同じである。「どの子にも空ありて吹く石鹼玉(仁喜)」

・安土・老蘇学区のまちづくりアドバイザーの滋賀県立大学森川稔准教授の著書『地域再生－滋賀の挑戦』には、八幡のまちづくりが語られている。

・いわゆる「八幡堀物語」である。堀は「汚れた」のではなく、「汚した」のであり、「埋まった」のではなく「埋めた」という加害者の位置に立って、八幡堀の汚れは市民の心の汚れと決めつける。堀は埋めた瞬間から後悔が始まると、経済的価値を離れて新しい価値観を創り出すために八幡堀を復元させようとJC(青年会議所)のメンバーや市民が立ち上がった物語には感動を覚える。

・そこに、市民意識のバロメータが書いてある。第一段階：無関心の段階(ふるさとは遠くにありて思うもの)、第二段階：気づきの段階、第三段階：景観の公共性を認識する(風景はみんなのものとな得する)、第四段階：啓発する側に立つ(風景の保存のリーダーになる)とある。

・安土学区と老蘇学区では、今「学区まちづくり協議会」を発足させようと準備委員会の方々が手弁当で頑張っている。老蘇学区は、この3月30日に「設立総会」を開催して、4月から発足。「つながりと出会いの学区民総参加のまちづくり」を目指される。安土学区は、25年4月を目指して「安土創発：歴史と文化のまちづくり」をコンセプトに、まちづくり計画と組織づくりを進められる。

・そこには、子や孫をはじめ後世にとってすばらしい環境を残したいという願いがある。地域を見つめ直し「無いものねだり」から「あるもの探し」への「何が残してやれるか」という意識変革の活動である。

・MIO運動(森健司会長)の「M(もったいない：循環)、O(おかげさま：共生)、H(ほどほどに：抑制)」も共感できる。

・このようにまちづくりは滋賀の各地で展開されている。「安土学区・老蘇学区まちづくり物語」という新たな1ページが始まろうとしている。子や孫にとって、ときめきを覚えるまちを残してやろうと、わが身を削って尽くそうとする人たちの動きが感じられる。

(K)